

徳永直の会 会報

第73号

2019年8月



目次

- ・「巻頭言」……………高木 陽助 1
- ・「中村青史先生 熊日賞 おめでとう」
「熊日賞受賞して感懐一班」……………中村 青史 2
- ・孟宗忌講話「徳永直と橋本英吉の関係」……………和田 崇 3
- ・「清水校区徳永直読書会」 雑記……………小山 誠 8
- ・文学散歩⑬『悪い夢』……………緒方 宏章 9
- ・第四十三回「孟宗忌」及び「令和二年総会」案内他……………10

巻頭言

徳永直の会会長 高木 陽助

二〇一九年五月一日、天皇陛下の退位に伴って皇太子が即位され、元号も平成から令和になった。令和の典拠になったのが万葉集ということ、各方面で急に話題になっている。周知のように万葉集は日本現存最古の歌集と言われているが、古今和歌集などと違って天皇の命によって編集されたものではない。八世紀の後半、個人としての意識が芽生えて来る中で、『古歌集』や『柿本人麻呂歌集』など先行の歌集から広く歌を集めて成立したものであると言われる。天皇や皇族、貴族だけでなく、防人や農民まで幅広い階層の人々が詠んだ約四千五百首の歌が収められている。

・天皇の皇子でありながら謀反の罪で処刑された有間皇子の歌

「家であれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」

・万葉歌人たちには見られない素朴で純真な庶民の心をうたった

防人の歌

「父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉せ忘れかねつる」

令和の御世になっても有間皇子の悲しい境遇に涙する人も多いし、東国からはるばる北九州の沿岸警備に否応も無く派遣された兵士達の、肉親との別れを惜しむ気持ちは今も変わらない。

戦後、一九四七年十月に発行された小説に『夜あけの風』がある。

終戦間際、妻を亡くした作者と娘二人（光枝とレイ子）は東北の妻の実家に疎開する。疎開、終戦、その後の生活の模様を娘レイ子の目を通して語られる。

「戦争がおわった」の章に次のような箇所がある。

「へいかの御放送をきいたもの、手をあげてみれ」

前の方にいる級長や、町の子たちがすぐ手をあげると、あちこちで手があがった。

「——争、まけたんだ」

やはり下をむいたままで、先生がいった。

「休戦とちがいますか？」

級長が手をあげてきいた。

「まけたからやめたんだ」

先生はおこった声でいった。レイ子はハツとした。ほんとに戦争がおしまいになったのだろうか？みんなの顔を見まわしながら、お父さんは知っているだろうか？と思ったりした。

太平洋戦争が一九四五年八月に終わった。陛下の命令だから従わなければならない、という。戦争の名の下にどれだけ多くの人々が亡くなったのだろうか。兵士や家族の悲しみは計り知れない。

中村青史先生 熊日賞 おめでとう

令和元年六月十三日、熊本日日新聞社は徳永直の会顧問（前会長）の中村青史氏に、第六十九回熊日賞（文化）を贈呈すると発表した。熊日賞は学術、教育、文化、スポーツ、社会などの各分野で永年にわたって活躍し、地域の発展などに貢献した個人や団体に熊本日日新聞社が贈っているもの。中村氏のこれまで永年にわたる功績は数え切れないが、最も嬉しかったことは三十年以上研究する徳永直が、熊本県近代文化功労者賞を戴いたことだという。今日「徳永直の会」が存続するのもすべて中村氏の努力によるものである。

熊日賞受賞して感懐一班

徳永直の会 顧問 中村 青史

第六十九回熊日賞を受賞した。受賞の理由の一つに徳永直の顕彰が挙げられている。

受賞にあたってのインタビューで、「随分いろいろなことをやって来られたが、とくにその中でうれしかったことは何ですか」との問いがあった。私はためらうことなく「徳



永直が第六十一回近代文化功労者に選ばれたことだ」と答えた。

徳永直の文学碑建立（一九七七年）に始まった熊本での顕彰事業は、熊本近代文学研究会における徳永直研究に引き継がれ、熊本徳永直の会の結成と孟宗忌実施及び会報発行と展開されていった。

熊本県教育委員会による近代文化功労者の認定は、直顕彰を始めて三十年の節目に当たる二〇〇八（平成二十）年のことであった。

徳永直の記念イベントを開催する折、各界の名義後援を取り付けるのだが、そんな時も熊本県教育委員会だけが、その後援を拒んだ。あの頃は、超右派の県会議員が居て、その圧力だとは大體想像できたものの、本当に悲しかった。小・中学校での副教材として検討と実践を踏まえて適当だと判断した作品を、現場に降ろそうとしても、教育委員会の圧力か校長の付度かで認められなかった。

そんな過去があったが故に、熊本県教育委員会が、徳永直を近代文化功労者として認めたことは、実に画期的なことであった。これで直作品（小学校用に「こんにやくを売るこども」中学校用の「最初の記憶」も教材として使えるとの喜びは、押さえようもなくうれしいことであったのだ。

ただ、これら直作品を教材として使用している現場があるかと思渡したところ、見当たらないのはどうしてだろうか。

第四十二回 孟宗忌講話

於・ガーデンパーティー

徳永直と橋本英吉の関係

橋本英吉生誕百二十周年を期に

三重大学教育学部准教授 和田 崇



【講話要旨】

昨年は、徳永直と同じくプロレタリア作家として名をはせた橋本英吉の生誕百二十年に当たり、静岡県三島市立図書館で彼の企画展示が設けられました。本日は、その企画展示を見た感想も交えながら、「徳永直と橋本英吉の関係」についてお話しします。

三島市立図書館での企画展示は、「生誕百二十年 剛直の文士 橋本英吉」と題して開催され、三段組みの展示棚が一つ設置されていました。大きさとしては、「くまもと文学・歴史館」における徳永直の常設展示と同じくらいかと思われます。もし、熊本で徳永の企画展示を行うとして、展示棚一つしか用意されていなかったら、「徳永直の会」の皆さんは不満に思われるかもしれません。しかし、橋本英吉が終生まで住んだ静岡では、この企画展示を開催するのも困難なほど、彼が十分に評価されていないのです。

この企画展示の開催にあたっては、橋本英吉のご遺族をはじめと

する顕彰会の方々がご尽力されました。私は昨年の十月に見に行き、図書館の司書の方に、「橋本英吉の文学を顕彰する会」の小澤高好会長をご紹介いただきました。また、小澤さんのご仲介で、橋本のご遺族ともつながりができました。

その時に、徳永直の橋本英吉宛書簡のコピーをいただきました。実は、この書簡の内容は黒木庸人さんの編著書『橋本英吉ノオト』にすでに掲載されていますので、紹介いたします。

《徳永直より橋本英吉への書簡》

いま少し酔ってかえったところ。かくめい記念日で狸穴のソ代協部のパーティーに行ったんだ。沢山な人でね。何かむしゃむしゃや喰ってのんできた。出がけに君の手紙をよんだので、考え帰ってきた。おれはいまの文壇とか民主主義文学とかに大不満なんだ。文学理論なんかいったどこにある。怒ってもしょうがないけれど、やはりおれたちはおれたちで仕事していかねばならぬと思う。おれにしても君にしても若くはないんだ。あといくつ仕事ができるかわからないんだから。もつと積極的にならねばならぬと思う。たとえば君にしてもあれだけの才能と経験とをこれだけで終わらせるのは大変な損だよ。もう少し欲でも理想でも何でもいいからプランをもたんなア。わあわあさわいだってほんとにちゃんとかける作家なんてそんなに沢山いるわけじゃないんだよ。そのうち来いよ。

この手紙の日付が昭和三十一（一九五六）年十一月七日です。で、徳永の死の一年半ぐらい前に書かれたものです。そして、この手紙で注目したいのは言葉遣いです。去年、三重県立美術館で、三重ゆかりの作家である横光利一と、川端康成という二人の作家の交

友関係をたどる展示があり、それで面白かったのは、最初二人は敬語で手紙のやりとりをしているのですが、だんだん仲がよくなると言葉遣いがフランクになっていき、「おれも」とか「君も」とかいふ二人称を使うようになります。この橋本宛書簡でも、徳永は「おれは」とか「君は」とか、最後は「そのうち来いよ」というフランクな言葉遣いで書いており、二人が親しい間柄であったことが伺えます。こうした文体から、故人の交友関係がわかるのです。

次に、徳永直と橋本英吉の生涯を比較したいと思います。橋本は明治三十一（一八九八）年十一月の生まれです。一方の徳永は明治三十二年一月（戸籍上は三月）ですから、二人は同級生なのです。昨年橋本が生誕百二十年だったということは、つまり、徳永も今年は生誕百二十年だということです。

年齢だけでなく出身地にも共通点があります。橋本英吉の本名は白石亀吉で、福岡県吉富村（現在の築上郡）に生まれました。大きくなくくりで言うと、徳永直と同じ九州の出身です。ただし、皆さんご存じの通り、徳永は小学校すらも、最後の六年生はほとんど行っておらず、名目上卒業ということにしてもらいましたが、橋本の方は高等小学校を卒業しています。ですから、学歴としては橋本の方が若干高学歴（？）だといえます。しかしながら、橋本もその後、郵便局や行商、炭坑夫などとして働いており、作家になる以前にさまざまな労働体験を持つ点でも二人は一致しています。

それから、橋本英吉は徳永直とほぼ同じ時期に上京します。注目すべきは、橋本が大正十三（一九二四）年一月に博文館印刷所に入社し、共同印刷争議に参加して徳永と知り合っていることです。ちなみに、橋本はモノタイプ工として勤務し、徳永は植字工でした。

職種は違っていました。共に同じ印刷所にいたということで、ここで本当に直接的な接点ができます。共同印刷の前身が博文館印刷所で、彼らが加盟した労働組合の名称は何度か変遷しますが、最終的に評議会出版労働組合に統一されます。その中で、橋本も徳永も共に組合員として活躍します。徳永の場合は、評議会出版労働組合の創立大会の際に議長に選出されるなど、かなりの要職に就いていました。

しかし、ここから二人の歩む道がいったん分かれます。徳永直は印刷所での労働体験を経た後、しばらくして出世作となる『太陽のない街』を書き作家としてデビューします。一方の橋本も、少し違ったルートで文壇デビューを果たします。

二人がデビューした大正末から昭和初期にかけては、日本文学史ではちょうどプロレタリア文学と並び新感覚派が現れた時期に当たります。戦後を代表する評論家の平野謙の言葉を借りれば、純文学の勢力図が、私小説などを書いてきた既成の馴れ合いの文壇と、新感覚派とプロレタリア文学という新進気鋭の文学勢力による「三派鼎立」の状況にありました。そんな中、橋本はプロレタリア文学と敵対した新感覚派に最初は参加していませんでした。それから最終的にはプロレタリア文学に移っていったのです。

左翼運動に携わっていた人が、戦時中になって次第に左翼運動から身を引いたり国策に便乗したりする行為を指す「転向」という言葉があります。この言葉をあえて借用すると、橋本の場合は、最初芸術主義的な勢力にいてそれから左翼運動に身を投じていくという「逆転向」を行ったのです。この時期は、橋本だけでなく、例えば片岡鉄兵とか江口渕といった芸術派にいた作家たちが左翼文学

の方に移っていくという現象がほかにも起こりました。

さらに複雑なのは、昭和三年頃になると、プロレタリア文学の勢力も支持政党の違いなどから何度も分裂を起こして、当時の言い方で言いますと、『文芸戦線』派（労農派）と『戦旗』派（ナツプ派）との二大勢力に大きく分かれます。前者は葉山嘉樹などが代表的で、後者には、徳永や小林多喜二がいました。そして、橋本はプロレタリア文学派に参加する時に、ナツプ派、つまり徳永と同じ勢力に入っていました。

こうして、同じプロレタリア作家として生涯にわたる二人の交流の原点が形成されていくのですが、昭和七年にコップ（ナツプから発展した組織）が弾圧され、橋本英吉は逮捕されます。徳永については逮捕こそされませんでした。ご存知のとおり『太陽のない街』の絶版宣言を行います。つまり、二人は思想を押し隠して転向せざるを得ない状況に直面したのです。ただし、転向をめぐる態度について判沢弘という評論家が、橋本は転向以降、伊豆に引き籠り、戦後も東京には戻らなかつたことを評価する一方、徳永は東京に戻って戦後の民主主義文学を牽引したことを批判しています。要するに、転向者としての自らの行いに對する真摯な反省という観点から、橋本を高く評価しているのです。

(5) この評価の是非はともかくとして、たしかに、橋本英吉は戦後の民主主義文学の中でも余り活躍しませんでした。作家としての活動は継続していましたが、徳永直と比肩するほどであった戦前の知名度は薄れていきます。しかしながら、橋本にはすぐく輝いた時期があります。昭和二十一年に発表した『富士山頂』という小説がヒットし、昭和二十三年には新東宝によって映画化もされました。キャ

ストは原節子や大河内傳次郎で、錚々たる役者が出演しています。おそらく、この『富士山頂』が、生涯を通じての代表作と言えるでしょう。

ここまで、いろいろと申し上げましたけれども、徳永直と橋本英吉の共通点を整理すると、同級生、九州出身、卒業後に複数の労働経験をjして、共同印刷に勤めてストライキを経験し、プロレタリア文学では同じ派閥に所属、そして転向の経験があるということです。

では、作品のレベルでは共通点はないのでしょうか。実は、橋本英吉は『太陽のない街』に登場する一場面と同じ題材を作品にしています。該当するのは、『太陽のない街』の「任務」の章・第二節「銃声」であり、これと同じ題材を橋本は「少年工の希い」という短編小説で描いています。どういう題材か説明しますと、ストライキでは労働者たちが団結しようとしても必ず裏切者（スキャップ）が出て、彼らがこつそりと働くことで工場が稼働し、組合員たちの行っているストライキが無意味化されてしまいます。そこで、ピケッティングというスト破りを監視する任務があり、「銃声」や「少年工の希い」では、会社が十代の少年工たちをトラックで運び、ストライキの穴埋めを行おうとするのを組合員たちが阻止しようとするのです。印刷会社の少年工たちは、戦前の徒弟制度の中で小さい頃から会社に訓練されているため、親方の言うことは絶対だという環境で育っています。だから、なかなかストライキには参加できません。でも実は、内心それでいいのか迷っている少年工もいて、組合員たちは彼らの中から内通者を得て、奪還作戦を実行します。題材が共通しているため、当然物語の内容はほぼ同じなのです。

が、内容が同じだからこそ、その描き方の違いが顕著に現れます。

——徒弟諸君、いまゆくぞツ。

声は浚われて、闇の中を、後方へすつ飛んだ。

——三間——一間——トラックを抜いた？

——止まれツ。

先頭の車内から、坊主頭が、一番先頭の運転台へ、拳銃を突きつけた——。

徳永の『太陽のない街』では、短いセンテンスが連続し、物語がスピーディに展開します。私は以前、このことについて論文を書いたことがあるのですが、この手法は当時流行っていたロシアの大衆小説などの文体が意識されています。簡易な文章の中に表意文字としての漢字を有効に使いながら、それを短く配列することで視覚性をとめない、労働者や農民の読者に分かりやすく小説を読ませる工夫がなされています。また、この後にトラックのヘッドライトの光が真夜中の闇を照らす場面があり、光の中で人影がチラチラと映るという描き方がされているのですが、そこなどはまるで映画を見ているような気分になります。戦後に山本薩夫監督が映画化した時も、元の文章が映画的であるため、その真夜中のヘッドライトの場面はそのまま採用されていました。

一方、橋本英吉の「少年工の希い」は、『太陽のない街』とは対照的に、しつかりとした硬派な文体で書かれています。次に引用するのは、少年工たちから組合に、自分たちはストライキに参加したいけれどもできないので、何月何日にトラックで運ばれるので皆さん助けて下さい、という内容の手紙が届き、組合員たちが皆で道路を見張っている場面です。

駅から締め出されてからは、腹の底まで濡れて歩き廻った。野菜を運ぶトラックが幾らか眠くなった彼等を驚かしたりする。闇の中からヒョッコリ牛に牽かせた肥料草が現われて怪しげに彼等を覗いて行き過ぎた。稀にやって来た乗用車を覗き込むと、無気味な程真白に塗りたてた芸者が、ツンとして見向きもしなかった。

先ほどの『太陽のない街』の文体と比べると、重厚というか、いわゆる純文学的な文体で書かれています。さらに、「腹の底まで濡れて歩き廻った」という表現は、象徴性を意識した文章です。雨の中、少年工たちの乗っているトラックが来ないかと捜し続けていることを、「腹の底まで濡れて歩き廻った」と象徴的に表現しているのですが、これはまさしく新感覚派の文体です。もちろん、当時の橋本英吉は既にプロレタリア文学陣営へ移っていましたが、新感覚派の文体は癖として残るのか、橋本はずっと新感覚派や芸術臭さが抜けきれないと言われ続けました。似たようなことは、同じ新感覚派出身の作家である川端康成にも言えて、彼の代表作の一つである『雪国』の冒頭は、次のように始まります。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」と、「夜の底が白くなった」という一文で、雪が積もって、暗闇の中で白い雪が積もっている情景を象徴的に描いています。「雪国」は、川端が新感覚派から離れて十年近く経ってから書かれましたが、良い意味で新感覚派の文体が残っています。

話が若干逸れましたが、橋本は芸術派、新感覚派の面影の残るプロレタリア文学ということで、評価されたり批判されたりしました。このように、一人のプロレタリア作家が同じ共同印刷のストラ

イキの一場面を描いたとしても、やはり作風は異なってくるので

以上、作品における共通点と差異を確認しましたが、もう一度二人の生涯の話に戻り、彼らがお互いを「労働者作家」（労働経験のある作家）として認め合っていたことも確認しておきます。それに関する資料を列挙すると、徳永直「解説」（橋本英吉著『棺と赤旗（新日本名作叢書）』）、橋本英吉「ただ一人の労働者作家徳永直」（『現代日本文学大系59前田河廣一郎・徳永直・伊藤永之介・壺井榮集』）、「唯一の労働者作家徳永直」（『日本現代文学全集73葉山嘉樹・徳永直・黒島傳治集 月報46』）があります。細かくは触れませんが、徳永は橋本のことを「日本文壇ではめずらしい労働者出身の作家」であり、貴重な存在だと評価しています。一方の橋本は、徳永を「ただ一人の労働者作家」であるとか、「唯一の労働者作家」であるという評価を下します。橋本がこれらの文書を書いた時期の徳永は、再婚問題などもあって、かなり文壇での地位が危うくなっていた時期でした。けれども橋本は、やはり同じ労働経験というキャリアを持つ者であるし、何十年という交友関係のある者として徳永の気持ちを汲み取り、いや、それでも徳永直は非常に重要な作家だから彼の書くものをきちんとして見ていかなければならないのだと訴えたのです。

橋本英吉が「徳永直との三十年」という文章を書いているように、二人は三十年来の友人でした。最後に、この文章から引用して、今回の話の終わりにしたいと思います。

知り合ってから三十年にもなれば、人柄などはよく分かったような気がしているけれども、いざ文章にするととなると、分か

らないことの方が多いいのらしい。（中略）しかしただ一つ云えることは、労働者の中で窮乏に鍛錬された青年期の精神が、月並みな言葉ではあるが、彼に粘りと謙虚な人柄を与えたのだと。／ 徳永はいつも自転車乗り廻している。（中略）私もこの自転車二度、初めは子供が入院したとき一週間ほど借用したが、次には強制疎開で貸家探しをしたとき一週間ほど借用したが、他の乗物では味えない親しみが沸いたのであった。少し大げさだが、自分の手足で動いて行くせいか、自転車自体の一部のような感じである。私が粘りとか謙虚なとか、在り来たりの文句を使うのは、こう云う低く構えた生活態度を指すのである。

こうして三十年來交流のあった橋本英吉を媒介にすることで、徳永直の新しい一面が見えてくるかもしれません。幸いなことに、橋本のご遺族が非常に協力的で、今後ご遺族が保管されている資料の調査もさせていただく予定です。徳永について何か新しい発見がありましたら、是非この会（徳永直の会）で公表させていただきたいと思っています。



「清水校区徳永直読書会」雑記

熊本市北区兎谷 小山 誠

清水校区の読書会は、中村先生との「夏目漱石旧居（跡）巡り」から始まりました。「これ一回で散会してしまうのはもったいない」「中村さんも退官され、今回のように時間がとれるなら、厚かましくお願いしてみたら」参加者皆さんからの要望を厚かましく伝えてみると「分かりました、徳永直の読書会をやりましょう」と、快く引き受けて頂きました。

その後、どのような作品を、いつ、何回に分け、どこで等決め、初回は「風」を近くの兎谷公民館にて、二回に分けて行う事にしました。まず、資料がない、「作ろう」！、中村先生から本を借り手作りし、当日です。六月七日の暑い、梅雨の時期だったので少し心配しましたが十二名参加。徳永直と聞いても、あまりよく知らない人ばかり、勿論私も「太陽のない街」は読んでいても作者が徳永直とは覚えていません。そういう意味では、講師の苦労は大変だったと思います。一八九九年飽託郡花園村に貧しい小作人の子として生まれた小説家等とその後、少し勉強し、皆さんに出すレジメにも書けるようになりましたが、「風」の冒頭の描写が、上熊本駅付近だとか、情景描写の素晴らしい作家だとかは、今になり分かったかのような気がしています。

このまま続けたいという参加者の希望が強く、二回目は、皆知ってる「太陽のない街」を秋に三回に分けてやることにしまし

た。長い作品なので作るのは無理、じゃあ、本を買って頂こうということになり、『徳永直文学選集1』を皆さん喜んで買ってくれました。『太陽のない街』は後の昭和天皇が、高等師範学校へ視察に訪れる場面から始まります。「摂政の宮殿下」だれ、横の〆何（伏せ字）戦前は削除されていた（なぜ）。戦後生まれの僕たちにとつて、検閲による削除など聞いたことも経験したこともありませんが、直が生きた時代は「当たり前前にあつたんだと！」九条改憲などでの外、時代を逆行させてはいけない。改めて思いを強くしました。

共同印刷争議に破れ千七百人もの解雇者を出した争議の場所？長屋はどこに？・・・講師の解説の合間に質問が（僕らの勉強不足のため）沢山です。あまり読み合わせが進みません。二回目は、レジメ裏に文京区の簡単な地図を載せ、高等師範学校は筑波大付属小あたり、千川橋は植物園前交差点あたり、千川上水は・・・「石川啄木が困窮と病身のため亡くなったところがここ」明治、大正頃は貧しい人が多く住んでいた等、当時の状況や場所を頭に描きながら読み合わせを行いました。

官憲と会社一体になった息詰まるような弾圧、体を張つての抵抗、今時の（過去私に関わった組合活動でも）労働争議では考えられない弾圧が行われていた事に、改めてビックリしました。直が作ったピラの内容は青年時代の私の演説口調に何かになっている所があり一人笑ってしまいました。

高枝が妹を殺されたという思いは理解しつつも、大川社長の孫娘の毒殺シーンは必要でしょうか？

文学散歩⑮

『悪い夢』

一

二十三の夏、熊本県の八代町で、いやな生活をしたことがある。ホンの一二ヶ月だったけれど二度とあの町にははいってゆけない気持ちが未だにしている。

その頃私は永らく印刷工場の方を失業して、竹細工の内職などしてゐた。箸とか柄杓とかを孟宗竹から作る仕事で、私の部落では老人や子供が昔からやつてゐたが、若い者の職業としてはやはりきまりわるい。家の軒下に乞食のやうな恰好で胡座をかき、竹の根をゴリゴリ削つてゐるとき、戸外を若い娘でも通られると、私はあはてて家の中に逃げこんだものだ。

(9) それだからある知人から新しい就職口を教えられると、もうそれ



新しい八代駅 (煙突は日本製紙)

緒方 宏章

について深く考へる力もなかったやうだ。母に頼んでわづかの旅費を工面してもらひ、古ぼけたセルの袴をつけて汽車に乗った。私の住んでゐる所は熊本市で八代の町までは汽車で一時間足らず距れてゐる。

しかし汽車の中での私はひどく弾んだ気持だった。新しい就職先といふのはともあれ新聞記者といふのだつたからである。勿論私はそんな仕事は始めてでよくわからない。而も先方は福岡に本社があるとかいふまだ聞いたこともない名前の新聞が、こんど新設した支局といふのだから、どうせ貧弱なものだらうくらゐには思つてゐた。第一月給もわからぬし、履歴書なども要らぬといふ。漠然ながら不安はあつたが、とにかく袴を着けた新聞記者だといふことだけでも満足であつた。それに私は文章を書くことが好きだつたし、どんな苦勞をしてもかまはない、すばらしい名文のニュースを書いて、八代町の人々を駭かしてやらうなどと空想してゐたのである。

まだ正午さがりの太陽がこの土地特有の「草木も眠る暑さ」で照りつけてゐる八代駅に私は降りた。駅前の古い柳は埃を浴びてグツタリしてゐるし、広場のまはりをかこんだ家々はみんな陽よけをおろして人通りもないし、道を訊ねやうにもとつときばがないやうに森閑としてゐる時刻だつた。

私は始めての埃りつばい細長い町筋を幾度も往復した。町の名前もわかつてゐるのだが私の訊ねる「西海新聞八代支局」といふのはなかなかめつからなかつた。町は駅前から始まつて繁華な通りをしばらくあるとすぐ町外れになつてしまふ。それかといつて辻を右に入つてゆけば間もなく田圃の中に出でしまひ、左に入つてゆくと一二丁で球磨川の土堤につき当たつてしまふのだつた。第一「西海

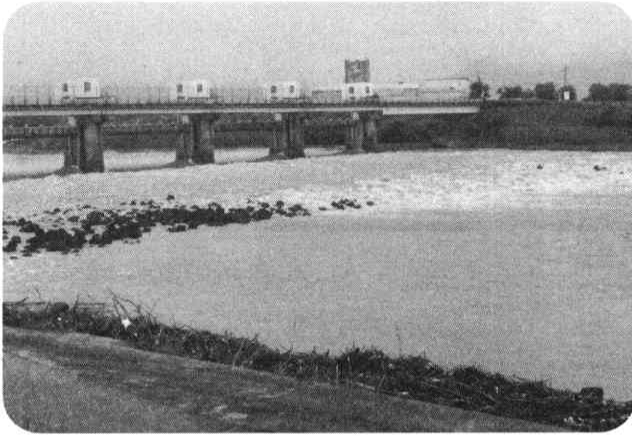
新聞」と訊くとみんな首を傾げるのである。狭い町の人々はそれよりか見当のつかぬ私の姿を胡散くささうにジロジロとみつめながら、土地訛りの尻ののびたアクセントで——さあ、知らんばいな——とこたへて、私がそこをすつかり遠ざかるまでは、陽よけのかげから見送つてゐる。私の浴衣は汗でくろいくまが出来、大事な袴も、埃で黄色く染めたやうになつてゐた。

〔桃蹊書房『をさない記憶』より〕

印刷工場を失業し、竹細工の内職をしていた二三歳の「私」は、ある人の紹介で、福岡に本社のある「西海新聞八代支局」に就職するために八代駅に降り立った。

目的の支社を探し出せずにいる「私」は、土堤のどの辺かでする琵琶の音の主を目で追ひ、河原とは反対の土堤の石垣にくつついて並んでいる一群の古ぼけたしもたやの二階にその支局を発見する。

そんな「私」が、八代での生活を『悪い夢』と題したのは、一体どんな出来事があつたのだろうか。



前川堰 (対岸が麦島。堰の奥に球磨川本流)

第四十三回「孟宗忌」と「令和二年総会」のご案内

一 第四十三回「孟宗忌」

期日 令和二年二月十五日(土) 午後二時から

会場 立田山登山口(泰勝寺入口)

二 令和二年総会

期日 令和二年二月十五日(土) 午後四時から

会場 ガーデンパーティー(予定)

会費納入のお願いと会員募集について

会費未納の方は、同封の振替用紙で納入されるよう、お願いいたします。

また、新規の会員を募集しています。活動に関心のある方、ご紹介をお願いします。